

タイプW1方言と方言崩壊：九州南部方言における動 詞テ形音韻現象

有元, 光彦
山口大学

<https://doi.org/10.15017/1518727>

出版情報：九州大学言語学論集. 35, pp.300-329, 2015. 九州大学大学院人文科学研究院言語学研究室
バージョン：
権利関係：



タイプ W1 方言と方言崩壊 —九州南部方言における動詞テ形音韻現象—

有元 光彦
(山口大学)

arimoto@yamaguchi-u.ac.jp

キーワード： 九州南部方言，動詞テ形音韻現象，全体性テ形現象方言，
方言崩壊，非テ形現象化

1. はじめに¹

本稿の目的は、動詞テ形音韻現象（動詞テ形に起こる特異な形態音韻現象）の 1 つの方言タイプである「全体性テ形現象方言（タイプ W1 方言）」が九州南部で広く観察されたことを記述するとともに、そこで起こっている方言崩壊現象について議論することにある。

テ形音韻現象は、有元光彦(2007c)によると、次のように定義されている。²

(1)テ形音韻現象：

動詞テ形において、共通語の「テ」「デ」に相当する部分が、動詞の種類（語幹末分節音の違い）によって、様々な音声で現れる形態音韻現象。

例えば、ある方言において、＜書いてきた＞を[kakkita]というように、共通語の「テ」に相当する部分にいわゆる促音が現れるとする。一方、＜取ってきた＞は*[tokkita]とは言えず、[tottekita]という[te]が現れる形しか存在しないとする。

¹ 本稿の一部は、平成 23～25 年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・基盤研究(C)「九州方言の音韻現象における接触・伝播・受容プロセスに関する研究」（研究代表者：有元光彦，No.23520554），及び平成 26 年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・基盤研究(C)「九州方言音韻現象の方言崩壊ヒストリーに基づく方言形成シナリオの構築」（研究代表者：有元光彦，No.26370540）によるものである。フィールドワークにおいては、各地域の教育委員会・公民館・図書館及びインフォーマントの方々に大変お世話になった。記して感謝する次第である。

² 「テ形音韻現象」という名称は、以前の拙論では「テ形現象」と呼んでいたものである。有元光彦(2010b)以後この名称に改めている。内容は変わっていない。

このように、動詞の種類の違いによって、「テ」「デ」に相当する部分の分布に偏りがある場合、その方言はテ形音韻現象を持つと言う。³

本稿では、九州南部方言にテ形音韻現象の同じ方言タイプが広く存在することを示すとともに、その中のいくつかの方言に起こっている方言崩壊現象、特に非テ形現象化について分析を試みる。なお、本稿で記述する「方言崩壊」の「方言」とは、方言システム（方言体系）全体のことを指している。

2. 方法論

本稿では、初期の生成音韻論(Generative Phonology)の枠組みを利用する。この枠組みでは、基底形(underlying form)に音韻ルール(phonological rule)が線的(linear)に適用されることによって、音声形(phonetic form)が派生される。⁴ 基底形は、心内辞書(mental lexicon)に登録されている辞書項目(lexical item)が形態的操作によって組み合わされたものである。従って、活用形の1つであるテ形の語構成（基底形）は、「動詞語幹＋テ形接辞」となっている。

動詞語幹には次のようなものがある。

(2) a. 子音語幹動詞：

/kaw/<買う>, /tob/<飛ぶ>, /jom/<読む>, /kas/<貸す>,
/kak/<書く>, /kog/<漕ぐ>, /tor/<取る>, /kat/<勝つ>,
/sin/<死ぬ>など

b. 母音語幹動詞：

/mi/<見る>, /oki/<起きる>, /de/<出る>, /uke/<受ける>など

c. 不規則語幹動詞：

/i/~/it/~/itate/<行く>⁵, /ki/<来る>, /s/<する>

ここでは、テ形に使われる語幹のみを挙げている。子音語幹動詞・母音語幹動詞の各語幹は他の活用形でも共通して使われるが、語幹を複数持つ不規則語幹動詞では活用形によって異なる語幹が使用される。

³ 共通語においても、動詞の種類によって、当該部分に「テ」が現れるか「デ」が現れるかの違いがあるので、共通語もテ形音韻現象を持っていることになる。従って、テ形音韻現象はすべての方言に存在することになるが、そうであるからと言って、本稿で言うテ形音韻現象の存在意義がなくなるわけではない。

⁴ 以下、基底形は記号//で、音声形は記号[]でそれぞれ括る。

⁵ /itate/は、語幹末分節音が/e/で終わるので、母音語幹動詞（下一段動詞）であるが、便宜上ここに並べておく。

テ形接辞は、本稿で扱う方言においてはすべて/te/である。また、テ形接辞の直後には様々な単語が続く。例えば、[kita]<（～て）きた>、[mire]～[miro]<（～て）みろ>、[kure]<（～て）くれ>等である。

3. データ属性

本稿で挙げたデータは、平成 25(2013)年 9 月のフィールドワークによって収集されたものである。収集した地域は、宮崎県えびの市、宮崎県都城市、鹿児島県霧島市、鹿児島県垂水市、鹿児島県肝属郡南大隅町、鹿児島県肝属郡肝付町、鹿児島県志布志市である。

データは音声記号によって表記する。データの適格性については、各音声形の直前に以下のような記号を付けて示す。即ち、記号*はその音声形が不適格であることを、記号?はやや不適格であることを、それぞれ表す。記号%はその音声形の方をよく使うとインフォーマントが判断していることを、記号&はインフォーマントが聞いたことがある（使用しない）と回答していることを、それぞれ表す。記号----は調査漏れであることを表す。

また、本稿では語幹末分節音(stem-final segment)が α である動詞を「 α 語幹動詞」と呼ぶ。例えば、語幹末分節音が/k/である動詞、/kak/<書く>は「k 語幹動詞」と呼ぶ。「 i_1, e_1 語幹動詞」は、語幹が 1 音節である i, e 語幹動詞を、「 i_2, e_2 語幹動詞」は、語幹が 2 音節以上の i, e 語幹動詞をそれぞれ表す（インデックス番号が付いていない場合は両方を含む）。

4. 分析

本節では、九州南部 7 方言の動詞テ形音韻現象について記述する。

4.1. えびの市方言

本節では、宮崎県西南部のえびの市方言のテ形音韻現象について記述する。まず、動詞テ形のデータを【表 1】に挙げる。

【表 1】えびの市方言の動詞テ形

語幹	A 氏	B 氏	意味
kaw<買う>	kokkita	kokkita	買ってきた
tob<飛ぶ>	tokkita toʔita	*tokkita tsukkita	飛んできた
jom<読む>	jonkita	jonkita	読んできた

kas<貸す>	kekkita	kasekkita	貸してきた
kak<書く>	kekkita	kekkita	書いてきた
kog<漕ぐ>	kokkita	kokkita	漕いできた
tor<取る>	tokkita	tokkita	取ってきた
kat<勝つ>	kakkita	kakkita	勝ってきた
sin<死ぬ>	keŋkure	keŋkure	死んでも
mi<見る>	mikkita	mikkita	見てきた
oki<起きる>	okikkita	okikkita	起きてきた
de<出る>	dekkita	dekkita	出てきた
uke<受ける>	ukekkita	ukekkita	受けてきた
i~it~itate<行く>	*ikkita itakkita	*ikkita itakkita	行ってきた
ki<来る>	kikkure	kikkure	来てみないか
s<する>	ŋikkita *sekkita	ŋikkita *sekkita	してきた

【表 1】から分かるように、共通語の「テ」「デ」に相当する部分の音声は、語幹末分節音の違いによって、次のような分布をしている。

【表 2】えびの市方言の子音語幹動詞の分布

	A 氏	B 氏
[te], [de]	(なし)	(なし)
促音	/w, b, s, k, g, r, t, i ₁ , i ₂ , e ₁ , e ₂ /の とき	/w, b, s, k, g, r, t, i ₁ , i ₂ , e ₁ , e ₂ /の とき
撥音	/m, n/のとき	/m, n/のとき
[tʃi], [dʒi]	(なし)	(なし)

次に、一段動詞の r 語幹化（ラ行五段化）を観察するために、一段動詞の否定形・過去形を【表 3】に挙げる。

【表 3】えびの市方言の一段動詞の否定形・過去形

	A 氏		B 氏	
	否定形	過去形	否定形	過去形

見る	*min miran	mita *mitta	*min miran	mita mitta
起きる	*okin okiran	okita okitta	*okin okiran	okita okitta
出る	*den deran	deta *detta	*den deran	deta detta
受ける	uken *ukeran	uketa *uketta	uken *ukeran	uketa *uketta

【表 3】を見ると分かるように、まず A 氏と B 氏の分布状況はほぼ同じである。r 語幹化については、 i_1 , i_2 , e_1 語幹動詞で起こりやすく、 e_2 語幹動詞では起こりにくいと考えられる。ただ、ここでは、テ形音韻現象においてすべて促音または撥音が現れることから、r 語幹化の影響があるのかどうかは不透明である。

以上から、えびの市方言は「全体性テ形現象方言（タイプ W1 方言）」であるということになる。タイプ W1 方言は、現時点では、鹿児島県南さつま市笠沙町片浦、及び枕崎市西白沢の方言に見られる。

次に、ルールについて考察する。有元光彦(2007:124-135)では、テ形音韻現象独特な音韻ルールは設定せず、当該箇所の基底形に原音素/Q/を立てている。即ち、基底形/te/を設定する根拠がないのである。もちろん、基底形/te/を設定し、次のようなルールを立てることも考えられなくはない。

(3) e 消去ルール：

語幹末分節音が X でない動詞語幹にテ形接辞/te/が続く場合、
テ形接辞/te/の/e/を消去せよ。

$$X = \phi$$

しかし、これは、音韻ルールを方言間で比較しやすくするためという記述上のテクニックの問題に過ぎず、言語上の妥当性はないと考えられる。従って、(3)の方法は採用しない。

4.2. 都城市方言

本節では、宮崎県西南部の都城市方言のテ形音韻現象について記述する。

まず、動詞テ形のデータを【表 4】に挙げる。⁶ 都城市方言の 1 名の話者（B 氏）は、厳密には北諸県郡山田町の出身である。

【表 4】都城市方言の動詞テ形

語幹	A 氏	B 氏	意味
kaw<買う>	kokkita	kokkita	買ってきた
tob<飛ぶ>	tsukkita	tsukkita	飛んできた
jom<読む>	jonkita	jonkita	読んできた
kas<貸す>	kafitekita kekkita kasekkita	kekkita kasekkita<若>	貸してきた
kak<書く>	kekkita	kekkita	書いてきた
kog<漕ぐ>	kokkita *kekkita	koidekita kokke:	漕いできた
tor<取る>	tokkita	tokkita	取ってきた
kat<勝つ>	kakkita	kakkita	勝ってきた
sin<死ぬ>	keŋŋkureba	keŋŋkureba	死んでも
mi<見る>	mitekita *mikkita	mikkita	見てきた
oki<起きる>	okikkita	okikkita	起きてきた
de<出る>	dekkita	dekkita	出てきた
uke<受ける>	ukekkita	ukekkita	受けてきた
i~it~itate<行く>	*ikkita itakkita	*ikkita itakkita	行ってきた
ki<来る>	kitekure kikkureŋkajo: kikkuri:	kikkure:	来てみないか
s<する>	ŋitekita ŋikkita sekkita<古>	ŋikkita<古> sekkita<新>	してきた

⁶ 表中の<若><新><古>とは、それぞれ「若い世代が用いるもの」「新しい形である」「古い形である」とインフォーマントが回答したことを表す。

【表 4】から分かるように、共通語の「テ」「デ」に相当する部分の音声は、語幹末分節音の違いによって、次のような分布をしている。

【表 5】都城市方言の子音語幹動詞の分布

	A 氏	B 氏
[te], [de]	/i ₁ /のとき	(なし)
促音	/w, b, s, k, g, r, t, i ₂ , e ₁ , e ₂ /のとき	/w, b, s, k, g, r, t, i ₁ , i ₂ , e ₁ , e ₂ /のとき
撥音	/m, n/のとき	/m, n/のとき
[tʃi], [dʒi]	(なし)	(なし)

次に、一段動詞の r 語幹化（ラ行五段化）を観察するために、一段動詞の否定形・過去形を【表 6】に挙げる。

【表 6】都城市方言の一段動詞の否定形・過去形

	A 氏		B 氏	
	否定形	過去形	否定形	過去形
見る	*min miran	mita *mitta	*min miran	mita *mitta
起きる	*okin okiran	okita okitta	*okin okiran	okita *okitta
出る	*den deran	deta *detta	*den deran	deta *detta
受ける	uken *ukeran	uketa *uketta	uken *ukeran	uketa *uketta

【表 6】を見ると分かるように、まず A 氏と B 氏の分布状況はほぼ同じである。r 語幹化については、i₁, i₂, e₁ 語幹動詞で起こりやすく、e₂ 語幹動詞では起こりにくいと考えられる。ただ、ここでは、テ形音韻現象においてすべて促音または撥音が現れることから、r 語幹化の影響があるのかどうかは不透明である。

以上から、都城市方言は「全体性テ形現象方言（タイプ W1 方言）」であるということになる。

次に、音韻ルールについて考察する。これについても、前述のえびの市方言

と同じ問題が関連する。ここでは省略する。

4.3. 霧島市方言

本節では、鹿児島県本土中部の霧島市（隼人町）方言のテ形音韻現象について記述する。

まず、動詞テ形のデータを【表 7】に挙げる。

【表 7】霧島市方言の動詞テ形

語幹	A 氏	B 氏	意味
kaw<買う>	kokkita	kokkita	買ってきた
tob<飛ぶ>	tsukkita	tsukkita	飛んできた
jom<読む>	jondekita jonkita	jonkita	読んできた
kas<貸す>	kasekkita	kasekkita	貸してきた
kak<書く>	kekkita	kekkita	書いてきた
kog<漕ぐ>	kokkita *kekkita	kokkita *kekkita	漕いできた
ojog<泳ぐ>	ojokkita *oekkita	ojokkita *oekkita	泳いできた
tor<取る>	tokkita	tokkita	取ってきた
kat<勝つ>	kakkita	kakkita	勝ってきた
sin<死ぬ>	keŋkure	keŋkure	死んでも
mi<見る>	mikkita	mikkita	見てきた
oki<起きる>	okikkita	okikkita	起きてきた
de<出る>	dekkita	dekkita	出てきた
uke<受ける>	ukekkita	ukekkita	受けてきた
i~it~itate<行く>	*ikkita itakkita	*ikkita itakkita	行ってきた
ki<来る>	kikkure	kikkure kikkuijai	来てみないか
s<する>	ŋikkita &sekkita	ŋikkita &sekkita	してきた

【表 7】から分かるように、共通語の「テ」「デ」に相当する部分の音声は、語幹末分節音の違いによって、次のような分布をしている。

【表 8】霧島市方言の子音語幹動詞の分布

	A 氏	B 氏
[te], [de]	(なし)	(なし)
促音	/w, b, s, k, g, r, t, i ₁ , i ₂ , e ₁ , e ₂ /の とき	/w, b, s, k, g, r, t, i ₁ , i ₂ , e ₁ , e ₂ /の とき
撥音	/m, n/のとき	/m, n/のとき
[tʃi], [dʒi]	(なし)	(なし)

次に、一段動詞の r 語幹化（ラ行五段化）を観察するために、一段動詞の否定形・過去形を【表 9】に挙げる。

【表 9】霧島市方言の一段動詞の否定形・過去形

	A 氏		B 氏	
	否定形	過去形	否定形	過去形
見る	*min mijan	mita %mitta	*min mijan	mita %mitta
起きる	*okin okijan	okitta	*okin okijan	okitta
出る	*den dejan	deta %detta	*den dejan	deta detta
受ける	uken *ukejan	uketa *uketta	uken *ukejan	uketa *uketta

【表 9】を見ると分かるように、まず A 氏と B 氏の分布状況はほぼ同じである。ただ、本方言では、r 語幹化ではなく、j 語幹化が起こっている。j 語幹化については、i₁, i₂, e₁ 語幹動詞で起こりやすく、e₂ 語幹動詞では起こりにくいと考えられる。ただ、ここでは、テ形音韻現象においてすべて促音または撥音が現れることから、j 語幹化の影響があるのかどうかは不透明である。

以上から、霧島市（隼人町）方言は「全体性テ形現象方言（タイプ W1 方言）」であるということになる。

次に、音韻ルールについて考察する。これについても、前述のえびの市方言

と同じ問題が関連する。ここでは省略する。

4.4. 垂水市方言

本節では、鹿児島県本土東南部の垂水市方言のテ形音韻現象について記述する。

まず、動詞テ形のデータを【表 10】に挙げる。

【表 10】垂水市方言の動詞テ形

語幹	A 氏	B 氏	意味
kaw<買う>	kokkita	kokkita	買ってきた
tob<飛ぶ>	toʔita tsukkita	tokkita %tsukkita	飛んできた
jom<読む>	jondekita joŋkita	joŋkita	読んできた
kas<貸す>	kasekkita	kasekkita	貸してきた
kak<書く>	kekkita	kekkita	書いてきた
kog<漕ぐ>	kokkita *kekkita	%kokkita kekkita	漕いできた
tor<取る>	tokkita	tokkita	取ってきた
kat<勝つ>	kakkita	kakkita	勝ってきた
sin<死ぬ>	keʃiŋkure	keʃiŋkure	死んでも
mi<見る>	mikkita	mikkita	見てきた
oki<起きる>	okikkita	okikkita	起きてきた
de<出る>	dekkita	dekkita	出てきた
uke<受ける>	ukekkita	ukekkita	受けてきた
i~it~itate<行く>	ikkita %itakkita	*ikkita itakkita	行ってきた
ki<来る>	kikkure	kikkure	来てみないか
s<する>	ʃikkita &sekkita	ʃikkita *sekkita	してきた

【表 10】から分かるように、共通語の「テ」「デ」に相当する部分の音声は、語幹末分節音の違いによって、次のような分布をしている。

【表 11】垂水市方言の子音語幹動詞の分布

	A 氏	B 氏
[te], [de]	(なし)	(なし)
促音	/w, b, s, k, g, r, t, i ₁ , i ₂ , e ₁ , e ₂ /の とき	/w, b, s, k, g, r, t, i ₁ , i ₂ , e ₁ , e ₂ /の とき
撥音	/m, n/のとき	/m, n/のとき
[tʃ], [dʒ]	(なし)	(なし)

次に、一段動詞の r 語幹化（ラ行五段化）を観察するために、一段動詞の否定形・過去形を【表 12】に挙げる。

【表 12】垂水市方言の一段動詞の否定形・過去形

	A 氏		B 氏	
	否定形	過去形	否定形	過去形
見る	min %miran	mita mitta	*min miran	mita *mitta
起きる	okin okiran	okita okitta	*okin okiran	okita okitta
出る	den deran	deta detta	*den deran	deta *detta
受ける	%uken ukeran	uketa uketta	uken *ukeran	uketa *uketta

【表 12】を見ると分かるように、まず A 氏と B 氏の分布状況はほぼ同じである。r 語幹化については、i₁, i₂, e₁ 語幹動詞で起こりやすく、e₂ 語幹動詞では起こりにくいと考えられる。ただ、ここでは、テ形音韻現象においてすべて促音または撥音が現れることから、r 語幹化の影響があるのかどうかは不透明である。

以上から、垂水市方言は「全体性テ形現象方言（タイプ W1 方言）」であるということになる。

次に、音韻ルールについて考察する。これについても、前述のえびの市方言と同じ問題が関連する。ここでは省略する。

4.5. 南大隅町方言

本節では、鹿児島県本土東南部の肝属郡南大隅町方言のテ形音韻現象について記述する。A 氏は佐多馬籠，B 氏は根占川南のインフォーマントである。両地域は距離的にかなり離れている。

まず，動詞テ形のデータを【表 13】に挙げる。

【表 13】南大隅町方言の動詞テ形

語幹	A 氏	B 氏	意味
kaw<買う>	ko:tekita kokkita	kokkita	買ってきた
tob<飛ぶ>	tokkita tsukkita<古>	tokkita %tsukkita	飛んできた
jom<読む>	jondekita *joŋkita	jondekita *joŋkita	読んできた
ogam<拝む>	-----	ogandekita ogaŋkita	
kas<貸す>	kafitekita *kakkita *kasekkita	*kakkita kasekkita	貸してきた
okos<起こす>	okoŋitekita *okokkita *okekkita	-----	
kak<書く>	kekkita	kekkita	書いてきた
kog<漕ぐ>	koidekita *kokkita *kekkita	koidekita *kokkita *kekkita	漕いできた
ojog<泳ぐ>	ojoidekita *ojokkita oekkita	oekkita	泳いできた
tor<取る>	tottekita *tokkita toʔjaraŋka	tottekita *tokkita	取ってきた
kat<勝つ>	kattekita *kakkita kaʔjaraŋka	kattekita *kakkita	勝ってきた

sin<死ぬ>	*ŋɨkure *ŋɨjaraŋka	ŋɨndekure *ŋɨkure	死んでも
mi<見る>	mittekita *mikkita	mittekita *mikkita	見てきた
oki<起きる>	okittekita *okikkita	okittekita &okikkita	起きてきた
de<出る>	dettekita *dekkita	deʔita	出てきた
uke<受ける>	ukettekita *ukekkita	ukekkita	受けてきた
sute<捨てる>	sutekkita	-----	捨ててきた
i~it~itate<行く>	ittekita *ikkita itakkita	ittekita *itekita itakkita	行ってきた
ki<来る>	kitemiraŋka *kiʔmiraŋka	kitekuijai *kikkuijai	来てみないか
s<する>	ŋɨtekita *ŋɨkkita *sekkita	ŋɨkkita *sekkita	してきた

【表 13】から分かるように、共通語の「テ」「デ」に相当する部分の音声は、語幹末分節音の違いによって、次のような分布をしている。

【表 14】南大隅町方言の子音語幹動詞の分布

	A 氏	B 氏
[te], [de]	/m ₁ , s, n, i ₁ , i ₂ , e ₁ , e ₂ /のとき	/r, t, n, i ₁ , i ₂ /
促音	/w, b, k, g, r, t/のとき	/w, b, s*, k, g, e ₁ , e ₂ /のとき
撥音	(なし)	/m ₂ /のとき
[tʃi], [dʒi]	(なし)	(なし)

【表 14】を見ると、両氏の間でかなり分布が異なることが分かる。

まず、A 氏に関しては、方言タイプが不明である。現時点までに観察されて

いない方言タイプである可能性が高いため、さらなる調査が必要である。ただ、理論的には「非テ形現象化」の解明に貢献できると考えられる。この点については、第6章で検討する。

一方、B氏に関しては、真性テ形現象方言である。ただ、その下位の方言タイプについては問題がある。全体を観察すると、タイプTA#方言に類似しているが、唯一、m語幹動詞のみが撥音で現れている。また、【表14】では記号s*で表したように、s語幹動詞はe語幹動詞になっているようである。このことから、タイプTA#方言とは別の方言タイプを設定する必要があるが出てくる。ここでは、「タイプTA##方言」と呼ぶことにする。ただし、音韻ルールには変更ない。音韻ルールとしては、以下の4種類が設定される。(4)と(5)は同じルールである。

7

(4) e 消去ルール：

語幹末分節音が X でない動詞語幹にテ形接辞/te/が続く場合、
テ形接辞/te/の/e/を消去せよ。

$X = /r, t, n/$

(5) e 消去ルール：

$e \rightarrow \phi / [-\text{syl}, +\text{cor}, -\text{cont}]^c] t ___]$

(6) 単語末子音群簡略化ルール：

単語末で2つの子音が連続するとき、単語末の方の子音を消去せよ。

(7) 逆行同化ルール：

形態素末・単語末の子音を、その直後にある子音に、鼻音性以外の点で、
同化せよ。

(8) 単語末有声子音鼻音化ルール：

単語末の有声子音/g, b, m, n/を鼻音化せよ。

これらの音韻ルールを適用したときの派生過程は、次のようになる。/tob/ <

⁷ ルールにおける弁別素性は、[syl]=syllabic (音節主音性)、[cor]=coronal (舌頂性)、[cont]=continuant (継続音性)をそれぞれ示す。また、記号^cは補集合(complement)を表す。

飛ぶ>, /ogam/<拝む>, /sin/<死ぬ>を例に取り, 派生過程を示す。⁸

(9)派生過程

	[[[tob][te]][kita]]	[[[ogam][te]][kita]]	[[[sin][te]][kure]]
(5)	tob t kita	ogam t kita	sin te kure
(6)	tob kita	ogam kita	sin te kure
(7)	tok kita	ogaŋ kita	sin te kure
(8)	----	----	----
	[tokkita]	[ogaŋkita]	[ʃindekure]

タイプ TA 方言の場合には, 「単語末有声子音鼻音化ルール→逆行同化ルール」という順序であるが, 南大隅町方言 (B 氏) の場合には, 「逆行同化ルール→単語末有声子音鼻音化ルール」という順序になる。

次に, 一段動詞の r 語幹化 (ラ行五段化) を観察するために, 一段動詞の否定形・過去形を【表 15】に挙げる。

【表 15】南大隅町方言の一段動詞の否定形・過去形

	A 氏		B 氏	
	否定形	過去形	否定形	過去形
見る	*min miran *mijan	mita *mitta	*min miran *mijan	mita *mitta
起きる	*okin okiran	okita okitta	okin %okiran	okita *okitta
出る	denai *den *deran	deta *detta	den %deran	deta *detta
受ける	ukenai *uken *ukejan	uketa *uketta	uken *ukeran	uketa *uketta
捨てる	sutenai		----	----

⁸ 途中の派生過程における[]は省略してある。また, [[[sin][te]][kure]]においては, 最終的に順行同化ルールが適用され, [te]は[de]として現れる。

	*suten	suteta		
	*suteran	*sutetta		

【表 15】を見ると分かるように、まず A 氏と B 氏の分布状況はかなり異なる。まず、共通する点としては、i 語幹動詞である。i₁, i₂ 語幹動詞は r 語幹化しているようである。それに対して、e 語幹動詞の分布はかなり異なる。A 氏では、e₁, e₂ 語幹動詞のいずれとも否定形で共通語形が現れている。i 語幹動詞では現れていないことから、なぜこのような分布が起こるかは不明である。一方、B 氏においては、e₁ 語幹動詞は r 語幹化しており、e₂ 語幹動詞は r 語幹化していないようである。

r 語幹化とテ形音韻現象との関連性については、B 氏では多少関連があるように考えられる。

4.6. 肝付町方言

本節では、鹿児島県本土東南部の肝属郡肝付町方言のテ形音韻現象について記述する。

まず、動詞テ形のデータを【表 16】に挙げる。

【表 16】肝付町方言の動詞テ形

語幹	A 氏	B 氏	意味
kaw<買う>	kokkita	kokkita	買ってきた
tob<飛ぶ>	tokkita *tsukkita	tokkita %tsukkita	飛んできた
jom<読む>	jondekita jonkita	jondekita jonkita	読んできた
kas<貸す>	kafitekita *kekkita *kasekkita	kasekkita	貸してきた
okos<起こす>	okekkita	-----	
kak<書く>	kekkita	kekkita	書いてきた
kog<漕ぐ>	kekkita	kokkita *kekkita	漕いできた
tor<取る>	tokkita tokkuijai	tokkita	取ってきた

kat<勝つ>	kakkita	kakkita	勝ってきた
sin<死ぬ>	keŋkure	keŋkure	死んでも
mi<見る>	mikkita	mikkita	見てきた
oki<起きる>	okittekita okikkita	okikkita	起きてきた
de<出る>	dekkita	dekkita	出てきた
uke<受ける>	ukekkita	ukekkita	受けてきた
i~it~itate<行く>	*ikkita itakkita	*ikkita itakkita	行ってきた
ki<来る>	kikkure<古>	kikkure kiʔmiraŋka	来てみないか
s<する>	ŋitekita ŋikkita *sekkita	ŋitekita ŋikkita *sekkita	してきた

【表 16】から分かるように、共通語の「テ」「デ」に相当する部分の音声は、語幹末分節音の違いによって、次のような分布をしている。

【表 17】 肝付町方言の子音語幹動詞の分布

	A 氏	B 氏
[te], [de]	(なし)	(なし)
促音	/w, b, s, k, g, r, t, i ₁ , i ₂ , e ₁ , e ₂ /の とき	/w, b, s*, k, g, r, t, i ₁ , i ₂ , e ₁ , e ₂ /の とき
撥音	/m, n/のとき	/m, n/のとき
[tʃi], [dʒi]	(なし)	(なし)

次に、一段動詞の r 語幹化（ラ行五段化）を観察するために、一段動詞の否定形・過去形を【表 18】に挙げる。

【表 18】 肝付町方言の一段動詞の否定形・過去形

	A 氏		B 氏	
	否定形	過去形	否定形	過去形
見る	*min	mita	*min	mita

	miran *mijan	mitta	miran *mijan	mitta
起きる	*okin okiran	okita okitta	*okin okiran	okita %okitta
出る	*den deran	deta detta	*den deran	deta detta
受ける	uken *ukeran	uketa uketta	uken *ukeran	uketa *uketta

【表 18】を見ると分かるように、まず A 氏と B 氏の分布状況はほぼ同じである。r 語幹化については、i₁, i₂, e₁ 語幹動詞で起こりやすく、e₂ 語幹動詞では起こりにくいと考えられる。ただ、ここでは、テ形音韻現象においてすべて促音または撥音が現れることから、r 語幹化の影響があるのかどうかは不透明である。

以上から、肝付町方言は「全体性テ形現象方言（タイプ W1 方言）」であるということになる。

次に、音韻ルールについて考察する。これについても、前述のえびの市方言と同じ問題が関連する。ここでは省略する。

4.7. 志布志市方言

本節では、鹿児島県本土東南部の志布志市方言のテ形音韻現象について記述する。

まず、動詞テ形のデータを【表 19】に挙げる。

【表 19】志布志市方言の動詞テ形

語幹	A 氏	B 氏	意味
kaw<買う>	kokkita	kokkita	買ってきた
tob<飛ぶ>	tsukkita tsuʔita	tsukkita	飛んできた
jom<読む>	jondekita joŋkita	jondekita joŋkita	読んできた
kas<貸す>	&kekkita kasekkita	kasekkita	貸してきた
kak<書く>	kekkita	kekkita	書いてきた

kog<漕ぐ>	kokkita *kekkita	koidekita kokkita *kekkita	漕いできた
ojog<泳ぐ>		ojokkita	泳いできた
tor<取る>	tokkita	tokkita	取ってきた
kat<勝つ>	kakkita	kattekita ?*kakkita	勝ってきた
sin<死ぬ>	keŋkure	keŋkure	死んでも
mi<見る>	mitekita mikkita	mitekita mikkita	見てきた
oki<起きる>	okikkita	okikkita	起きてきた
de<出る>	dekkita	dekkita	出てきた
uke<受ける>	ukekkita	ukekkita	受けてきた
i~it~itate<行く>	*ikkita itakkita	*ikkita itakkita	行ってきた
ki<来る>	kitekuijan kikkuijan	kitekuijan kikkuijan	来てみないか
s<する>	ŋitekita ŋikkita *sekkita	ŋitekita ŋikkita *sekkita	してきた

【表 19】から分かるように、共通語の「テ」「デ」に相当する部分の音声は、語幹末分節音の違いによって、次のような分布をしている。

【表 20】志布志市方言の子音語幹動詞の分布

	A 氏	B 氏
[te], [de]	(なし)	(なし)
促音	/w, b, s, k, g, r, t, i ₁ , i ₂ , e ₁ , e ₂ /の とき	/w, b, s, k, g, r, t, i ₁ , i ₂ , e ₁ , e ₂ /の とき
撥音	/m, n/のとき	/m, n/のとき
[tʃi], [dʒi]	(なし)	(なし)

次に、一段動詞の r 語幹化（ラ行五段化）を観察するために、一段動詞の否定形・過去形を【表 21】に挙げる。

【表 21】 志布志市方言の一段動詞の否定形・過去形

	A 氏		B 氏	
	否定形	過去形	否定形	過去形
見る	*min miran	mita *mitta	*min miran	mita mitta
起きる	*okin okiran	okita %okitta	okin okiran	okita okitta
出る	*den deran	deta %detta	?*den deran	deta detta
受ける	uken *ukeran	uketa *uketta	uken *ukeran	uketa *uketta

【表 21】を見ると分かるように、まず A 氏の r 語幹化については、 i_1 , i_2 , e_1 語幹動詞で起こりやすく、 e_2 語幹動詞では起こりにくいと考えられる。一方、B 氏の場合は、 i_1 , e_1 語幹動詞で r 語幹化しやすく、 e_2 語幹動詞では r 語幹化していない。ただ、ここでは、テ形音韻現象においてすべて促音または撥音が現れることから、r 語幹化の影響があるのかどうかは不透明である。

以上から、志布志市方言は「全体性テ形現象方言（タイプ W1 方言）」であるということになる。

次に、音韻ルールについて考察する。これについても、前述のえびの市方言と同じ問題が関連する。ここでは省略する。

5. 方言タイプの対照

本節では、本稿で扱った諸方言を方言タイプによって対照する。

まず、共通語の「テ」「デ」に相当する部分に現れる音声を【表 22】で比較する。ここでは、記号 Q はいわゆる促音、N は撥音、te は[te], de は[de]をそれぞれ表す。また、記号(Q)は e 語幹動詞で現れていることを示す。

【表 22】 諸方言の対照

	えびの市，都城市，霧島市，垂水市， 肝付町，志布志市方言	南大隅町方言 (A 氏)	南大隅町方言 (B 氏) TA##
w	Q	Q	Q

b	Q	Q	Q
m	N	de	N
s	Q	te	(Q)
k	Q	Q	Q
g	Q	Q	Q
r	Q	Q	te
t	Q	Q	te
n	N	de	de
i ₁	Q	te	te
i ₂	Q	te	te
e ₁	Q	te	Q
e ₂	Q	te	Q
it	Q	te	te
ki	Q	te	te
s/se	Q	te	Q

第4章でも議論したが、【表 22】から、本稿で取り上げた諸方言は次のような方言タイプであるとまとめられる。

- (10) a. えびの市，都城市，霧島市，垂水市，肝付町，志布志市方言
 ・ ・ ・ 全体性テ形現象方言（タイプ W1 方言）
 b. 南大隅町方言（A 氏） ・ ・ ・ ？
 c. 南大隅町方言（B 氏） ・ ・ ・ 真性テ形現象方言（タイプ TA## 方言）

(10a)のタイプ W1 方言は、宮崎県西部や鹿児島県のほぼ全域を占める、いわゆる九州南部の典型的な方言タイプであると考えることができる。鹿児島県南さつま市笠沙町片浦や鹿児島県枕崎市西白沢方言も同じ方言タイプである(cf. 有元光彦(2007a:124-135))。

それに対して、南大隅町方言はイレギュラーな様相を呈している。まず、南大隅町方言（B 氏）は、基本的にはタイプ TA# 方言（旧タイプ TB 方言）と類似しているが、別の方言タイプと考え、「タイプ TA## 方言」と呼んだ。⁹

⁹ 南大隅町方言や岡児ケ水方言（鹿児島県指宿市山川岡児ケ水（旧揖宿郡山川町岡児ケ水）、データは【表 23】参照）のように、鹿児島県本土南端だけにタイプ W1 方言とは異なる方言タイプが現れていることは、地理的にも興味深い。この問題については保

問題は、南大隅町方言（A 氏）である。この方言については、現時点では方言タイプを確定できない。確定するためには、さらなる調査が必要であるが、その前に次節で理論的な考察をしておく。

6. 方言崩壊

4.5.で記述したように、南大隅町方言（A 氏）の方言タイプは明らかになっていない。しかし、これを設定するプロセスを通して、「非テ形現象化」という方言崩壊ヒストリーを理論的に解明できる可能性が出てきた。本節では、この点について試論を展開してみる。

まず、南大隅町方言（A 氏）をそれと類似した方言タイプと比較してみる。
【表 23】を見られたい。

【表 23】方言タイプの比較

	タイプ W1 方言	南大隅町方言 (A 氏)	タイプ TA#方言	南大隅町方言 (B 氏) TA##	岡兒ヶ水 方言 TD
w	Q	Q	Q	Q	Q
b	Q	Q	Q	Q	Q
m	N	de	Q	N	de
s	Q	te	Q	(Q)	Q
k	Q	Q	Q	Q	Q
g	Q	Q	Q	Q	Q
r	Q	Q	te	te	te
t	Q	Q	te	te	te
n	N	de	de	de	de
i1	Q	te	te/Q	te	te
i2	Q	te	te/Q	te	te
e1	Q	te	te/Q	Q	Q
e2	Q	te	te/Q	Q	Q
it	Q	te	te	te	te
ki	Q	te	te	te	te
s/se	Q	te	te	Q	Q

留する。

【表 23】を見て、まず言えることは、「南大隅町方言（A 氏）は真性テ形現象方言である（に近い）」ということであろう。なぜなら、Q が現れていること、そして Q の分布に偏りがあるからである。

一方で、【表 23】を単純に見ると、南大隅町方言（A 氏）は全体性テ形現象方言（タイプ W1 方言）が部分的に崩壊しているかのように見えるかもしれない。なぜなら、前者は後者の一部分が[te]や[de]になったものと見えるからである。しかし、これは表面的な捉え方であろう。問題は、なぜ後者の m, s, n 語幹動詞だけが[te], [de]で現れているのか、ということである。この問題に解答するためには、【表 23】を表面的に観察するだけでは不十分である。

そこで、南大隅町方言（A 氏）を真性テ形現象方言と仮定し、そのコアルールである e 消去ルールを設定してみよう。次のようになる。

(11) 南大隅町方言（A 氏）の e 消去ルール：

$$e \rightarrow \phi / \{[-syl, +cor, +cont], [+nas]\}^c] t ___]$$

(11)の適用環境の一部である{[-syl, +cor, +cont], [+nas]}を「XΔ」と呼ぶ（南大隅町方言（A 氏）を「タイプ TΔ 方言」と呼ぶ）とすると、XΔ は次に挙げる XD, XE と非常に類似した集合であることがわかる。¹⁰

(12) a. XD={[-syl, +cor, -cont], [+nas]}

b. XE={[-syl, +cor], [+nas]}

(12a)はタイプ TD 方言の e 消去ルールの適用環境の一部であり、(12b)はタイプ TE 方言のそれである。XΔ の集合が XD, XE の集合に類似していることは、両者に何らかの関連性があることを予測させる。即ち、仮に XΔ が XD から派生されたとすると、そこには XD の[-cont]の素性値変更が起こったことになる。一方、XΔ が XE から派生されたとすると、そこでは XE に[+cont]が積集合演算されたことになる。いずれの変化がより妥当性が高いのであろうか。

この問題を解明するためには、“方言崩壊”の具体的な表れの 1 つである「非テ形現象化」について考えてみる必要がある。非テ形現象化については、様々

¹⁰ 「タイプ TΔ 方言」と命名すると、真性テ形現象方言の 1 つと捉えられてしまう危険性があるが、後述するように、現時点では真性テ形現象方言と全体性テ形現象方言の中間段階の方言タイプと考えている。

な文献で言及されている。例えば、有元光彦(2007a:205-222)では、新たな方言タイプ(共生タイプ)、擬似テ形現象の兆しや真性テ形現象の名残が見られる方言、音節数条件を例として挙げ、非テ形現象化の指向性を仮定している。¹¹ 例えば、次のような仮説を立てている (cf. 有元光彦(2007a:220))。

(13)非テ形現象化の指向性 β :

非テ形現象化は、積集合演算ではそれに関わる弁別素性の指定の数を減らす方向へと変化する。和集合演算では新たな弁別素性を付加する方向へと変化する。

(13)は、真性テ形現象方言における e 消去ルールの適用環境の一部に適用される。さらに、この指向性は地理的な観点からも支持される。九州西南部ではテ形音韻現象に関して、地理的に2本のルート(西ルート、東ルート)を描くことができる。これらのルートの収束(収斂)点为天草地域である。この収束(収斂)という概念を非テ形現象化と捉えると、非テ形現象化の指向性が収束(収斂)する方向と合致することになる。具体的には、有元光彦(2007a:220-222)で議論したように、次のような2本のルートが仮定され、非テ形現象化の方向を示すことができる。

(14) a. 西ルート : $XA=[-syl, +cor, -cont] > XC=[-syl, +cor] > XG=[-syl]$

b. 東ルート : $XD=\{[-syl, +cor, -cont], [+nas]\} > XE=\{[-syl, +cor], [+nas]\} > XG=[-syl]$

(14)の不等号で表したように、いずれも左から右に向かって非テ形現象化が起こっていると仮定できる。そうすると、地理的にも、天草地域に向かって対称的に収束(収斂)している状況に合致していることになる。

(14)の非テ形現象化の方向に妥当性があるとする、それぞれの方言タイプの集合どうしにも何らかの関連性があることになる。例えば(14a)において、 $XA > XC$ の変化には素性 $[-cont]$ の消去が起こっている。これは(14b)の $XD > XE$ でも起こっている。また、(14a)の $XC > XG$ の変化は $[+cor]$ の消去である。これは、(14b)の $XE > XG$ にも起こっている。 $XE > XG$ では、まず $[+cor]$ という積集合演算

¹¹ 有元光彦(2007a:207)には「この共生タイプは、真性テ形現象の崩壊という言語変化の中間段階にあると位置付けられる。」とあるが、現時点では共生タイプが非テ形現象化であるとは考えていない。共生タイプは“方言形成”の具体的な表れの1つであり、“方言形成”と“方言崩壊”とは対立・共存する概念であると考えている。

が消去される。その結果、{[-syl], [+nas]}という集合が出来上がるが、この集合は[-syl]という集合と同じものである。結局のところ、(14a)と(14b)ではいずれも積集合演算の消去という同じ変化が起こっているのである。従って、真性テ形現象方言に起こる非テ形現象化は次のようにまとめられる。¹²

(15)真性テ形現象方言における非テ形現象化：

- a. 積集合演算の消去である。
- b. 順序は、[-cont]が[+cor]よりも優先される。

もちろん、真性テ形現象方言の e 消去ルール自体は、その適用環境に補集合を設定しているので、(15a)が示すことは、e 消去ルールの適用領域が狭くなる方向へと変化していることである。

以上のように考えてくると、非テ形現象化という現象においては、何らかの積集合演算の集合が消去されることはあっても、追加されることはないようである。従って、「XE に[+cont]が積集合演算されて XΔ ができた」のではなく、「XD の[-cont]の素性値変更が起こって XΔ ができた」と考える方が妥当であろう。¹³ ただ、そう仮定したとしても、素性値変更という操作は非常に大きな変化であることには変わりない。ここには何が起きているのだろうか。

この議論の当初、「【表 23】を単純に見ると、南大隅町方言（A 氏）は全体性テ形現象方言（タイプ W1 方言）が部分的に崩壊しているかのように見えるかもしれない。」というコメントをした。この見解がある程度示唆的であるとしたら、即ち南大隅町方言（A 氏）と全体性テ形現象方言（タイプ W1 方言）が何らかの関連性を持っていると仮定すると、どうであろうか。現時点で、南大隅町方言（A 氏）は真性テ形現象方言（タイプ TD 方言）から派生したものであると仮定している。しかも、そこでは素性値変更という非常に大きな変化が起こっている。そこで、この変化の行き先を「全体性テ形現象方言への非テ形現象化」であると捉えることはできないだろうか。全体性テ形現象方言は、真性

¹² 有元光彦(2007b:49)では、非テ形現象化の表れとして、亜種、即ち感染の問題も扱っている。そこでは、次のような表れの尺度を仮定している。

(i)非テ形現象化の相対的な表れ：

亜種（音節数条件<和集合演算（[+nas]<[+back],[+voice]））<擬態<相転移

¹³ 平成 26(2014)年 9 月の追加調査では、タイプ TD 方言のような方言タイプが見られている。そうであるならば、タイプ TΔ 方言をタイプ TD 方言に関連付ける有力な証拠ともなり得る。詳細な記述は別の機会に譲る。

テ形現象方言のような e 消去ルールは持っていない。従って、全体性テ形現象方言への変化を「ルール自体の消去」と仮定できる。

以上、 $X\Delta$ が XD と類似していること、及び $X\Delta$ を「全体性テ形現象方言への非テ形現象化」の中間段階の 1 つであると位置付けることから考えると、ここで起こっている非テ形現象化は次のように図示される。

(16)全体性テ形現象方言への非テ形現象化：

$XD=\{[-syl, +cor, -cont], [+nas]\} > XE=\{[-syl, +cor], [+nas]\} > XG=[-syl]$

∨ ← ([cont]の) 素性値変更

$X\Delta=\{[-syl, +cor, +cont], [+nas]\}$

∨

.....

∨ ← (e 消去) ルール自体の消去

W1

現時点では、素性値変更とルール消去という 2 つの操作が非常に大きな変化を起こすという点でのみ XD と $X\Delta$ を関連付けている。おそらく XD から $W1$ に至るまでに、他の段階も経るのではないかと考えられる。全体性テ形現象方言への非テ形現象化についての議論には、まだデータが足りない。

最後に、現時点までに捉えられている非テ形現象化の方向性について、次にまとめておく。

(17)非テ形現象化の方向性：

a. 真性テ形現象方言内 (タイプ TG 方言へ) の方向性：

適用環境の変更 (適用領域を狭くする (積集合演算の消去, 和集合演算の付加))。

b. 擬似テ形現象方言への方向性： 出力の変更。

c. 全体性テ形現象方言への方向性：

素性値変更, (e 消去) ルール自体の消去。

(17)には非テ形現象方言への各段階については述べられていないが、その問題をひとまず横に置いておいたとしても、(17)には考えられるあらゆる操作が含まれているように見える。即ち、方言崩壊の“あり得る(possible)”方向性がほぼ挙げられている。このことは、テ形音韻現象が起こっている九州西部を中

心とした地域に、ほぼすべての方言タイプが存在していることを表している。そして、それらすべての方言タイプには、非テ形現象化が常に進行していることになる。方言崩壊が常に進行しつつ、テ形音韻現象の世界全体としては、1つの自律した世界を形成しているのではなかろうか。

7. おわりに

本稿では、まず九州南部に見られる全体性テ形現象方言（タイプ W1 方言）について記述した。また、そのタイプ W1 方言に囲まれるように、鹿児島県南端の南大隅町方言に、新たな方言タイプであるタイプ TA##方言と、表面的には全体性テ形現象方言に類似した分布を示すタイプ TΔ 方言とが発見された。ただ、後者については、真性テ形現象方言とも捉えることが可能であり、真性テ形現象方言と全体性テ形現象方言との中間的な方言タイプのようにであった。

そこで本稿では、この方言タイプを「全体性テ形現象方言への非テ形現象化」の中間段階と捉えた。それによって、今まで観察できていなかった「全体性テ形現象方言への非テ形現象化」の一部分を解明することができた。しかし、この非テ形現象化においては、他にも様々な段階がある可能性があり、それは今後の課題とするしかない。

ただ、「全体性テ形現象方言への非テ形現象化」の一部分を垣間見ることができたことによって、「真性テ形現象方言内の非テ形現象化」及び「擬似テ形現象方言への非テ形現象化」と共に、非テ形現象化の全体像を予測できる段階になった。それは、テ形音韻現象が見られる地域では、非テ形現象化のあらゆる方向性（操作）が採られている、それゆえあらゆる方言タイプが存在する可能性がある、というものである。

テ形音韻現象が自律した1つの世界であるとする、その中では方言形成と方言崩壊が共存している。後者の表れの1つである非テ形現象化においては、理論的に考え得るすべての方向性（操作）が採られ、その結果あらゆる種類の方言タイプが存在している。このような全体像が仮定できるのである。

言うまでもなく現時点ではこの世界観は仮説でしかないが、さらに調査を進め、記述的にも理論的にも精密にしていかなければならないだろう。

参考文献

Archangeli, D. & D.T. Langendoen(eds.)(1997) *Optimality Theory*. Oxford: Blackwell Publishers.

有元光彦(2007a)『九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象の研究』ひつじ書房.

———(2007b)『方言研究の構成的アプローチの試み—九州方言の動詞テ形・

タ形における形態音韻現象—』平成 16～18 年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・基盤研究(C)(2)「九州方言における音便現象とテ形現象の“棲み分け”に関する研究」(No.16520281, 研究代表者：有元光彦) 研究成果報告書.

———(2007c)「テ形音韻現象に対する構成的アプローチの試み」九州方言研究会第 24 回研究発表会 (山口大学) ハンドアウト.

———(2007d)「音韻論・生物学・構成的アプローチ—九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象—」社会言語科学会第 20 回研究大会 (関西学院大学) ハンドアウト (揭示用) .

———(2007e)「音韻論・生物学・構成的アプローチ—九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象—」『社会言語科学会 第 20 回大会発表論文集』社会言語科学会編 pp.190-193.

———(2008a)「長崎県中北部本土方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢 (山口大学教育学部)』第 57 巻・第 1 部 pp.1-13.

———(2008b)「再訪：熊本県天草方言の動詞テ形における形態音韻現象」『言語の研究—ユーラシア諸言語からの視座—』(語学教育フォーラム 第 16 号) 大東文化大学語学教育研究所 pp.357-374.

———(2009)「長崎県中南部本土方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢 (山口大学教育学部)』第 58 巻 第 1 部 pp.15-31.

———(2010a)「熊本県本土西部方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢 (山口大学教育学部)』第 59 巻 第 1 部 pp.35-52.

———(2010b)『テ形音韻現象における構成的アプローチの試み』平成 19～21 年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・挑戦的萌芽研究「方言研究における構成的アプローチの構築」(No.19652941, 研究代表者：有元光彦) 研究成果報告書.

———(2011)「熊本県本土南部・鹿児島県本土北西部方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢 (山口大学教育学部)』第 60 巻・第 1 部 pp.25-38.

———(2012)「共生タイプについて—九州西部方言の動詞におけるテ形音韻現象を対象として—」第 12 回広島・方言研究会 (県立広島大学) ハンドアウト, ハンドアウト別紙.

———(2013)「タイプ PD'''', PG 方言の発見—熊本県北東部・大分県中西部方言の動詞テ形における形態音韻現象—」『研究論叢 (山口大学教育学部)』第 62 巻・第 1 部 pp.37-55.

———(2014a)『九州方言におけるテ形音韻現象の記述的・構成的研究』平成 23～25 年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・基盤研究(C)「九州方

- 言の音韻現象における接触・伝播・受容プロセスに関する研究」(No.23520554, 研究代表者：有元光彦) 研究成果報告書.
- (2014b)「音韻ルールの方言周圏論」小林隆編(2014), pp.189-207.
- 日高水穂(2002)「言語の体系性と方言地理学」『方言地理学の課題』馬瀬良雄監修 明治書院 pp.165-178.
- (2008)「方言形成における「伝播」と「接触」」『方言研究の前衛』桂書房 pp.425-442.
- 井上史雄(2000)『東北方言の変遷』秋山書店.
- 飯豊毅一ほか編(1983)『講座方言学 9 九州地方の方言』国書刊行会.
- Kager, R.(1999) *Optimality Theory*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kenstowicz, M.(1994) *Phonology in Generative Grammar*, Blackwell Publishers.
- 小林隆(2004)『方言学的日本語史の方法』ひつじ書房.
- (2012)「方言形成論の到達点と課題—方言周圏論を核にして—」『東北大学文学研究科研究年報』第 61 号 pp.28-64.
- ほか(2008)『方言の形成』(シリーズ方言学 1) 岩波書店.
- 編(2014)『柳田方言学の現代的意義—あいさつ表現と方言形成論』ひつじ書房.
- 九州方言学会編(1991)『九州方言の基礎的研究 改訂版』風間書房.
- Newmeyer, F.J.(2005) *Possible and Probable Languages*, Oxford Univ. Pr.
- 大西拓一郎(2008)『現代方言の世界 (シリーズ現代日本語の世界 6)』朝倉書店.
- Prince, A. & P. Smolensky(1993) *Optimality Theory: Constraint Interaction in Generative Grammar*. Technical Report CU-CS-696-95. RuCCS-TR-2.[Published in 2004, Oxford:Blackwell Publishing]
- 沢木幹栄(1996)「語形伝播のシミュレーション」『言語学林 1995▶1996』三省堂 pp.911-919.
- 澤村美幸(2011)『日本語方言形成論の視点』岩波書店.
- 徳川宗賢(1993)『方言地理学の展開』ひつじ書房.
- 屋名池誠(2009)「〔書評〕有元光彦著『九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象の研究』」『日本語の研究』第 5 巻 3 号 pp.132-138.

Type-W1-Dialects and Breakdown of Dialect System
—*Te*-form Verb Phonological Phenomenon in the Southern Kyushu Dialects—

Mitsuhiko ARIMOTO
(Yamaguchi University)

In this paper, I would like to describe ‘*Te*-form verb phonological phenomenon’ in the Southern Kyushu Dialects, at first. In particular, I show the description of ‘Type-W1-dialects’ and the discovery of ‘Type-TA##-dialects.’

I also describe *Minamiosumi-cho* dialect which is theoretically located between ‘True *Te*-form Phenomenon Dialects’ and ‘Whole *Te*-form Phenomenon Dialects.’ I can regard this dialect as the middle stage on ‘Change to Non-*Te*-form-Phenomenon’ which is one of the expression of ‘Breakdown of Dialect System.’

By this theoretical description, I can predict an overall picture of ‘Change to Non-*Te*-form-Phenomenon.’ There is an autonomous world in *Te*-form verb phonological phenomenon, in which ‘Formation of Dialect System’ and ‘Breakdown of Dialect System’ are co-occurred.